第4回東アジア日本研究者協議会国際学術大会
分科会１-Ｃ　パネル

日本資本主義の精神史

2019年 11月 2日(土) 08:30-10:00
国立台湾大学 普通教学館 204

漢陽大学日本学国際比較研究所

日 程

パネル：日本資本主義の精神史

司会 ： 李康民(Yi, Kang-Min 漢陽大学)

発表1 ： 朴奎泰(Park, Kyu-Tae 漢陽大学) …… 1
「山本七平の「日本資本主義の精神」の再考：日本文化論の観点から」

発表2 ： 金弼東(Kim, Pil-Dong 世明大学) …… 9
「日本人の思惟様式：近世日本人の職業倫理」

発表3 ： 片岡龍(Kataoka, Ryu 東北大学) …… 13
「日本資本主義と日本農本主義」

討論1 ： 藍弘岳(Lan, Hung-yueh 中央研究院)

討論2 ： 徐東周(Seo, Dong-Ju ソウル大学)

討論3 ： 田世民(Tien, Shih-min 台湾大学)

山本七平の『日本資本主義の精神』再考

: 日本文化論の観点から

朴奎泰 (韓国・漢陽大学)

1979年に出た山本七平(1921−1991)の『日本資本主義の精神』(以下『精神』)は当時日本のビジネスマン特に中小企業経営者たちから厚く支持され大型ベストセーラとなり、今でも新しい版本が出てきている。従来この本は主に鈴木正三や石田梅岩に焦点が与えられて論じられてきた。たとえば江戸初期に正三によって生まれた「日本資本主義の精神」が江戸後期に梅岩および石門心学によってさらに全国的に広まって日本人の「勤勉の哲学」となり、農民や職人や町人階級の勤労と節約とその結果としての富の蓄積を推進したということである。

こうした理解は正しい。ただ、従来の研究で看過されたり、あるいは十分に論じられていない側面にも目を向けなければならない。いわゆる「日本文化論」もしくは「日本人論」の観点がそれである。日本人の勤勉の精神こそ日本資本主義を支えてきたものであり、正三こそその源流であると主張する『精神』は、ある意味においては正三の職業倫理に基づいた一種の日本文化論ともいえよう。この発表の目的は日本文化論の観点から『精神』を再考し、さらに山本七平日本学の意義を再評価することにある。

Ⅰ. 山本日本学の世界

山本に対する評価は様々である。彼に対し丸山眞男や柳田國男などと並ぶような独創的な思想家として高く評価する立場があれば、逆に研究者としての資質を疑う観点もある。ともあれ、アカデミズムからずっと無視されてきた在野の学者であった山本は1921

年東京で三代目キリスト教を信仰する家で生まれ、青山学院高等商業学部を卒業した直後の1942年に軍に入営し、砲兵少尉としてフィリピンで戦争を体験した。敗戦のあと一年四ヶ月間捕虜収容所に収監され、1946年に帰国した以来1956年(35才)東京の自宅に「山本書店」という一人出版社を立て、生物学や聖書学関連の本を直接翻訳出版しはじめた。その後、彼の記念碑的な處女作『日本人とユダヤ人』をイザヤ・ベンダサンという筆名で出した1970年(50才)以来、山本が書いた膨大な著作は大きく聖書・日本軍・日本文化・日本歴史研究といった四つの範疇に分けることができよう。実のところ、それらは相互密接に連関しており、相重なっている。一言でそれらはみな「日本文化論」に属すると言えよう。この発表の主な分析対象である『精神』も例外ではない。

Ⅱ. 日本資本主義精神の構造：機能集団と共同体の二元性

山本が正三や梅岩を取り上げて提示した日本資本主義の精神とはつまり「勤勉の精神」である。彼はそれを「勤勉の哲学」と呼んだ。だが、そうした一般的な理解だけでは不十分である。山本は「勤勉の哲学」という日本資本主義の精神の深層に潜んでいる重要な原理を読み出した。次の引用文に示されている「疑似血縁集団の原理」がそれである。

「日本は、共同体と機能集団、または血縁の原理と組織の原理という形で分化していない社会である。いわば血縁を一つのイデオロギーにして、実際は血縁関係にないものを、擬制の血縁関係で統制してきた社会であった。そして、長い戦乱と混乱を経て、これが一つの社会秩序として完成したのが、だいたい徳川時代であり、この社会構造に対応している精神構造も、この時代に形成された。」(『精神』, 119)[1)]

ここで山本は血縁の原理に立脚した「共同体」と組織の原理に基づいた「機能集団」とを対比させている。しかも日本社会の一番重要な一特徴として、両者が分化していないままイデオロギー化した疑似血縁関係を通して社会構造および精神構造が形成してき

1) 以下の頁数は2015年ビジネス社版による。

た点をあげている。その際、山本が徳川時代に注目したのは単に正三や梅岩の思想だけではない。日本資本主義精神の元型をいうとき、正三や梅岩のみならずほかの意味深い洞察が山本にはあった。藩資本主義がそれである。正三と梅岩の思想は「資本主義の倫理」になれる。しかしながら資本主義の倫理が成立するためにはまず「資本の論理」が存在しなければならない。ならば、資本の論理とは何か。山本によれば、それは「資本だけが利潤を生む」という命題に従う論理を指す。(『精神』, 216) 山本はそうした「資本の論理」を生んだ徳川時代の「藩資本主義」について次のようにのべる。

「徳川時代に前記の原則に基づいた「藩資本主義」というべきものが出てきても、少しも不思議ではない。それは、この原則を統治の原則とし、一藩を「資本の論理」に基づく経営体として把握しようという行き方である。いわば「藩株式会社」的発想で、私はこれを「富藩主義」と考え、それは明治の「富国」と戦後の「日本株式会社」の原型だと思っている。」(『精神』, 220)

山本はこのような藩資本主義の精神を実践した代表的な事例として米沢藩第九代目の藩主であった上杉鷹山(1751−1822)をあげている。山本はこうした藩資本主義のなかに現代日本企業の原型をみたのである。要するに、「藩資本主義」の生んだ「資本の論理」を支えたのは機能集団と共同体の二元構造であったのだ。

Ⅲ.『精神』と日本文化論

以上で機能集団と共同体の二重構造を設定している『精神』の土台をなしているのがつまり宗教・仕事・空気・世間・まこと(誠)・和などの文化コードといって差し支えなかろう。

第一に、宗教とはある文化体系の深部を構成する一要素である。山本は『精神』において機能集団と共同体とが併存する日本の会社共同体を「宗教的な共同体」と呼びながら(『精神』, 46)、さらに「日本の伝統、特にそれがもつ独特の宗教性が日本資本主義の倫理

の基礎である」(『精神』, 1)という。正三や梅岩の思想が宗教と密接な関係にあることはいうまでもない。禅宗・浄土真宗・陽明学・儒教・武士道・神道・民衆宗教などと日本資本主義の関係について論じている研究も少なくない。

第二に、労働を宗教的修行とみた正三と同じく、山本も仕事を経済的行為ではなく精神的 な充足を求めるある種の宗教的行為と捉えた。(『精神』, 39〜43) ルース・ベネディクトが『菊と刀』において仕事(任務)を「無限の責務」である「義務」として把握したのも正三や山本の立場と相通じる。日本人にとって「任務」(仕事)は天皇および日本国への忠や親に対する孝の義務と同様「無限の責務」として見なされている、ということである。

第三に、山本は「日本資本主義は何か「見えざる原則」とでも言うべきもので動いている」(『精神』, 15)とみたが、その「見えざる原則」は彼が『精神』以前に「空気」と名乗った文化コードと深い関係がある。たとえば山本は「日本では「儀礼のルール」を踏みはずしてはならず、その場の「空気」に水をさすようなことをいってはならないこと…「見えざる原則」にふれないのが日本の原則」(『精神』, 17〜18)だと指摘する。「山本の最高傑作」または「日本文化論の最高傑作」とも言われる『空気の研究』(1977年)において、山本は「空気」概念によって日本人の伝統的な精神の構造を解明しつつ、日本社会を支配してきた「空気」の強力さや危険性を警戒する。そこで「空気」とは「それに否も応もなく拘束・呪縛される実体のない意見・常識・世論・無意識」を意味する一つのイデオロギーに他ならない。

第四に、このような「空気」は「世間」の日常化したものである。言い換えれば「世間」という大きなものがくだけて日常的になり、いろんな場面にいろんな形で現れるようになったのが「空気」なのである。こうして「世間」が日常化し、「空気」が定着すると、それが物凄い力をもつようになる。日本ではしばしば「機能集団がすぐ共同体に転化する」が、その結果疑似血縁集団としての「共同体を構成し、超倫理的集団に転化している。」(『精神』, 66〜67) この際「超倫理的集団」はすなわち「世間共同体」と言い換えることもできよう。日本のあらゆる企業はそれぞれ一つの機能集団であると同時にこうした「世間共同体」でもあるわけだ。

第五に、山本によれば、「徳川時代とは、上は諸侯から下は庶民にまで、いや応なく経済を教え、「資本の論理」にしたがわない者は破滅することを、実地に教育した時代であった。と同時に、この「資本の論理」の上に「資本の倫理」を樹立しなければ、その「資本の論理」自体が崩壊することを教えた時代なのである。」 この際の「資本の倫理」とは、「「資本の論理」を厳格に実施しつつも、本人は無私・無欲であらねばならぬという倫理」である。(『精神』, 250–251) 要するに、それは無私を前提にする「まことの倫理」に他ならない。

最後に、こうした「まことの倫理」と対応する文化コードとして日本そのものを象徴する「和の論理」がある。山本によると、組織(機能集団)は常にある目的をもち、その目的に相応する正当化を必要とする。したがって組織自体は決して絶対性を持たず、しかも組織の存続自体を目的とすることも許されない。これに対し、家族(共同体)の方は目的をもつ組織ではなく、それ自体が存続のために機能さえすればそれで充分である。だから家族の究極的な目的はその崩壊を阻むことにある。そのために要請されるものは正当化ではなく、むしろそれ自体の存続に必要な「和の 論理」なのである。明治以後現代にいたるまで日本社会における最大の問題は常に西欧的正当化(個)と日本的「和の論理」(共同体)とを、各々の組織や日本全体のなかでどのように位置づけるのか、ということと関わっている。(山本七平, 2011:197) 多くの場合正当性や善悪の可否を問わずに日本優先主義に流れてしまう日本人の傾向もこのような観点から説明できよう。山本はこうした「和の論理」こそ彼が「日本的組織」と見なした世間共同体の著しい特徴であると捉えたようだ。山本の見る限りにおいて、日本には個の組織化にして民主主義の基礎となるべき組織(システム)といった概念がない。それに対し、日本的組織は疑似血縁集団とも言える「組織的家族」(systematic family)に当たるということである。たとえは日本軍は明治時代以来「組織的家族」を代表するものである。

Ⅳ. 日本資本主義の精神と「日本教」

個人よりも自分の属している世間共同体をもっと優先しつつ、空気が読めるし、空気に従い、無私のまことの倫理に基づいて共同体の和を実現しようとする日本人のことを山本は「日本教徒」と称した。日本資本主義の精神とはつまりこの日本教徒たちによって作り出され、維持されてきたわけであろう。というと、「日本教」とは何か。日本教に教義がなく、日本人も日本教徒という自覚がない。論理も規範も神もなければ歴史意識もない。対象を対象として認識するという発想もなく、しかも事実と規範とを混同しがちである。ただ単に事実を自分の価値観と一致させてしまうような雰囲気すなわち「空気」があるだけである。そうした「空気」が自分の回りを取り囲み、一種の宗教的雰囲気を形成する。これらの特徴をもつ社会学的なあるものを山本は「日本教」と呼んだのである。日本教は一つの強力な宗教である。しかしながらそれは一般的な意味での宗教ではない。

日本教には強くて暗黙的なルールが存在するが、それに従うか否かはあくまでももっぱら「主観的確信」による。そうした極端的な主観主義や自己中心主義は客観性を排除し、論理的に思考する姿勢を必要としない。それゆえに機能集団はたやすく共同体に転化し、その結果日本教は二元構造をもつ日本資本主義の精神と結び付くことになる。

日本人は決して「無宗教」ではない。日本人は「人間性」を基準とするような宗教すなわち日本教をもつからである。ここでいう「人間性」とは日本人ならば誰でも暗黙的に認めるような「分を越えない人間」をさす言葉である。それは「役の原理」・「場の倫理」・「和の原理」・「世間」・「義理」・「空気」・「まこと」などの日本文化コードが指向する人間に他ならない。山本は西郷隆盛を日本教の聖人と見た。なぜならば西郷は徹底的に無私のまことを実践した人物で、ついに日本教徒として殉教したものだからということである。

結びにかえて：コミュニタス的自由のために

機能集団と共同体という二元構造に対する『精神』での強調はそれを日本文化論の観点から読み直す必要性を喚起させるようなものであった。実際に『精神』においては仕事，空気，世間，まこと，和など典型的な日本文化コードおよびそれらを代表するような日本教的要素が日本資本主義の言説を導いている。実に日本教という概念は文化的要因が圧倒的なのである。

むろん文化還元主義を警戒すべきであることはいうまでもない。その前提のうえに、我々は『精神』をはじめとする山本日本学が否定的日本文化論と肯定的日本文化論との境界に位置するという点に注目しなければならない。まず山本は日本人の持つ深いコンプレクスから日本を救おうとした。たとえば山本は「徳川時代は少しも停滞していない。否、むしろ進歩発展しているのである。…当時の日本は少しも欧米に劣ってはいない。…思想的にも停滞とはいえない。…経済的合理性を当然とし、同時にその合理性追求における倫理は確立し、その考え方が、藩主から町人、下級武士、郷士に至るまで浸透している。」(『精神』, 261~262)といい、日本や日本人を肯定するような哲学を構想したのである。

それで山本は正三や梅岩の思想を「勤勉の哲学」と呼んでいたわけである。『精神』はその姉妹編といえる『勤勉の哲学』とともに基本的に肯定的日本文化論に属するものといえる。勿論それは植民地の経営と日本資本主義の関係に関する言及が全くないという点においてはたしかに限界を見せる。ところで、小室直樹は『精神』の著者である山本に対し、彼を日本資本主義の崩壊の可能性を警告したある種の予言者として位置づける。この評価は間違っていない。要するに、『精神』は否定的な日本文化論と肯定的な日本文化論とが微妙に混じりあっている中層構造をもつ。そうした中層性の意味はいまだ問われたことがない。たとえばコミュウニタス的な境界性の意味を問う必要がある。山本こそまさにコミュウニタス的な境界人だったのではないか。彼が多くの著書で繰り返して提起する「真の自由とは何者か」という、日本におけるやや異端的な問いかけもこのコミュニタス的な境界人から出てきたに違いなかろう。

日本人の思惟様式：近世日本人の職業倫理

金弼東 (韓国・世明大学)

1. 初めに

- 日本人の勤勉性は日本の国内外で認められているが、反日感情が時々噴出している韓国でも、日本人の勤勉・倹約・正直・礼儀などの徳目は、日本人の長所として認める世論が優勢である。しかし、韓国ではこれを実践する「美徳」が、日本近代資本主義の「精神」である認識は希薄である。
- ベンジャミン・フランクリンは、「勤勉」「誠実」「信用」「倹約」の生活態度で富を蓄え、社会に貢献することが「成功する商人の道」であることを自ら証明し、「職業観念の上にたった合理的生活態度」を重視した。
- マックス・ヴェーバー は、資本主義の「精神」は「営利欲」ではなく、「特有のエトス」であり、それは絶え間ない勤労と倹約、正直、信用のような徳性であり、それを貫く禁欲的な生活態度を保有しているとき、はじめて近代資本主義は順調に発展することができるということを論証した。
- 私も「民衆思想」研究という観点からこの点を注目してきた。私は、日本人の思惟様式としての通俗道徳が、日本的資本主義精神の土壌であることを明らかにし、その根拠をまず近世時代の職業倫理から探ってみたい。

2. 日本人の思惟様式としての通俗道徳

- 通俗道徳は、日本人の生活文化の中に存在する日本人の伝統的な思惟様式である。

- 安丸良夫:通俗道徳は「日本近代化の根源的なエネルギー」
  「ある歴史的発展段階における広範な民衆の自己形成・自己解放の努力が込められる歴史歴・具体的形態」、「近世中期以降の民衆的諸思想の展開過程を調べてゆくと、新しい思想形成の努力は例外なく通俗道徳の主張の結果」、「通俗的諸徳目の実現という形態において、広範な民衆の厳しい自己形成・自己確立の努力がなされ、その過程に噴出した厖大な社会的・人間的エネルギーが日本近代化の原動力」、「近代日本社会における広範な人々のもっとも日常的な生活規範」、「近代日本社会の様々な困難な矛盾を処理する最も重要なメカニズム」[1)]
- 聖徳太子十七条憲法:「以和為貴」「以礼為本」「信是義本」「背私向公」「早朝晏退」
- 「倹約令」『梅津長者物語』『大黒舞』『養生訓』
- オールコック『大君の都』、　近代社会形成　期農村社会の「節倹法」「自力更生」、「休日ノイローゼ」「勤勉性」

3. 通俗道徳と職業倫理

- 「四民日用思想」「心学思想」「報徳思想」「人心道心説」: 生活態度、職分、職業倫理
  ー「四民日用思想」:四民の存在意味強調、自分の職分に忠実するのが仏行(勤労＝成仏)
  ー「心学思想」:勤勉、倹約、正直の精神→仁・義・礼・智・信の商人哲学確立
  ー「報徳思想」:勤·倹·譲の生活態度→農村復興運動
  ー「人心道心説」:質素倹約の生活態度→相互扶助の制度化と農村の近代化
- 企業家精神・企業文化形成:「三大商人」の精神
- 通俗道徳の流通構造:実践的民衆思想家→公共福祉・社会貢献の実践思想拡大・構築
  ー心学講舎、報徳社、改心楼:民衆教導(価値の共有)

---

1) 安丸良夫『日本の近代化と民衆思想』青木書店、1974、6~9頁

－井原西鶴・近松門左衛門の作品のキーワード:堅固・才覚・始末・分別・堪忍・正直→

勤勉・創意努力・倹約・判断力・忍耐・誠意[2)]

- 「道徳経済合一説」、近現代の企業家精神、日本的経営
- 精神主義の両面性: 近代化の基盤であり、支配体制を支える基盤でもある。

4. 終わりに

- 山本七平は、「勤勉・貯蓄」は「長い間日本人の徳目であり、これを行うことが美徳とされてきた」が、その理由は「それが一つの独立した価値、いわば宗教的ともいえる価値をもっているかれであり、それが価値を持ちうることは、一つの思想の帰結だかである」[3)]といった。彼は、この問題意識から日本独特の発想として「仕事＝宗教的修行」が日本人の伝統的精神文化であることをあきらかにした。「日本的資本主義」の「精神的源泉」を求める場合、山本の論理は示唆するところがある。
- 日本人の思惟様式としての通俗道徳の生活規範が近世の職業倫理を支え、日本的資本主義精神を生み出した。

2) 高尾一彦『近世の庶民文化』岩波書店、1968、22~23頁
3) 山本七平『勤勉の哲学』祥伝社、2008、3~4頁

日本資本主義と日本農本主義

–初期資本主義時代の二宮尊徳の思想を中心に–

片岡龍 (日本・東北大学)

1、課題

近年日本では、新たな農本主義の提唱や、歴史的な農本主義の再検討が、比較的目につくようになっている[1)]。これは、おそらくグローバル資本主義の農業にたいする影響という問題関心によるものであろう。日本資本主義を主題とするパネル・セッションで、本報告が農本主義を取り上げるのも、同様の問題関心にもとづいている。

農本主義運動は、第一次世界大戦後の恐慌とくに世界大恐慌下の農業恐慌が多くの農民生活に破壊的打撃をもたらすことによって、従来の農本思想から転化した[2)]。それは、まさに日本資本主義が「国家独占資本主義」へと移行した時期である[3)]。農本主義は「近代化・産業化・都市化に対抗するイデオロギーとして生まれた」[4)]が、ある意味、両者は同根であった。

通常、日本資本主義の本格的展開は明治維新以降とされるにもかかわらず、幕末の二宮尊徳(1787−1856)の思想を中心にするのは、「生産」や「労働」ではなく「生命」や「生涯(勤労)」といった観点から、産業化以前にさかのぼって両者の関係を再考したいか

1) 宇沢弘文『「豊かな社会」の貧しさ』(岩波書店、1989)、宇根豊『愛国心と愛郷心—新しい農本主義の可能性』(農文協、2015)、岩崎正弥『農本思想の社会史—生活と国体の交錯』(京都大学学術出版会、1997)、野本京子『戦前期ペザンティズムの系譜—農本主義の再検討』(日本経済評論社、1999)など。

2) 岩井忠熊「農本思想」(『国史大辞典』吉川弘文館、1990)。

3) 資本主義の歴史的変化の必然性を解明しようとする「段階論」の見方によれば、日本では、17〜18世紀の交から1890年ごろまでの重商主義段階、1890年ごろから1900年代末までの自由主義段階、1907年にはじまる恐慌を契機として1920年に確立する帝国主義段階を経て、1929年末にはじまる世界恐慌を契機とする国家独占資本主義へと移行した(大内力『日本経済論(上)』東京大学出版会、1962、84〜86頁)。

4) 大内雅利「農本主義」(『新社会学事典』有斐閣、1993)。

らである。

産業革命以前の資本主義を「初期資本主義」とする立場からは、日本では18世紀末から19世紀初期、おそくとも天保期(1830〜44年)に初期資本主義の段階に入ったとされる[5)]。二宮尊徳は、この初期資本主義の時代に農村復興運動を指導した思想家であった。

2、素材

上記の課題を、以下の素材を通して考えてみたい。

尊徳が亡くなった安政三(1856)年の大晦日の日記に、次のような文言が記されている。

> 先生、疾病に伏し、門弟子を呼んで曰く、「『鳥の将に死せんとするや、その鳴や哀し。人の将に死せんとするや、その言や善し』と。慎めや、慎めや小子。速やかにせんと欲するなかれ。速やかにせんと欲すれば、則ち大事を乱る。勤めよや小子。倦むことなかれ」(『二宮尊徳全集　第五巻』、龍渓書舎、1165頁)

「鳥の･･･」は言うまでもなく、『論語』泰伯篇に記録された曾子が死に臨んだときの言葉。『論語』泰伯篇には、もう一つ曾子臨終の際の語を記す。やはりその語を用いながら、尊徳はちょうど一年前に当たる安政二(1855)年大晦日の日記に、次のように記している。

> 千秋万歳楽　予が足を開ケ、予が手を開ケ、予が書翰ヲ見よ、予が日記ヲ見よ、戦々兢々深淵に臨むが如く、薄氷をふむが如し。

---

5) 中村哲『日本初期資本主義史論』ミネルヴァ書房、1991、15頁。

生涯(life)の終焉に臨んで、尊徳はなにを言い遺そうとしたのだろうか。

安政二年大晦日の日記の語を、福住正兄『二宮翁夜話』第60条では、小田原仕法廃止のときのものとしている。

> 小田原の仕法は、先君の命に依て開き、当君の命に依て畳む。皆是までなり。凡天地間の万物の生滅する、皆天地の令命による。私に生滅するにはあらず。春風に万物生じ、秋風に枯落する皆天地之命令なり。豈私ならんや。曾子死に臨んで、予が手を開け、予が足を開け、云々と云り。予も又然り。予が日記を見よ、予が書翰留を見よ、戦々兢々深淵に臨むが如く、薄氷を踏むが如し。畳置きに成て予免るゝことを知る哉と云べし。汝等早く帰りて芋種を囲ひ置き来陽暖を待て又植弘むべし。決して心得違ひする事なかれ、慎めや慎めや

小田原藩が領内における仕法の廃止を告げ、尊徳に小田原領内への立ち入りを禁じたのは弘化三(1846)年、尊徳60歳のときであり、安政二年からは10年ほど遡ったときの話である。これが福住の創作にかかるものか、尊徳が日光仕法中に死を自覚し、かつての語を思い返して記したものかはわからない。いずれにせよ、日記と書翰に、時々刻々ときざまれた彼の生命(life)の軌跡を見ることを、その後を継ぐものたちに願っていたにちがいない。その思いが「慎めや、慎めや小子。速やかにせんと欲するなかれ･･･」の語に表れている。

急いではならない、小さいことを積み重ね、一歩一歩進んでいかなければ、物事は成し遂げられないという教えを、尊徳は農業生活の体験から得たようである。一鍬ずつ返さなければ田は耕せない。一株ずつ植え、一株ずつ刈り取らなければなければ稲を実らせ、米を収穫することはできない。一杵ずつ臼づかなければ精米できない(『開発勤行談』『一鍬耕耘談』『一株植付談』『一株刈取談』『往来自然談』、全集一、963～992頁、『二宮先生夜話続篇』第45条、全集三十六、851頁など)。そして、秋から冬にかけては芋種を植えて来春を待つ。そして、夜には縄を綯う。

天地の椚(もぢ)り尽せぬ命綱、たゞ長かれとねがへ諸人(『三才独楽集』)

このように、一縄一縄縒り、継ぎ伸ばしていくことが、彼の生命(life)の軌跡であり、それ以外の生涯(life)はなかった。

尊徳の生命・生涯(life)観の背景には、「天地」は無窮の生命(life)を生み出すものである、という考えがある。

天地之生万物ヤ、至ラサル所ナシ。人其中ニ生シ、五穀ヲ食シテ命ヲ養ヒ、綿帛以テ寒暑ヲ凌キ、草木ヲ集テ居住ナシ、心身共ニ安ク、欲スル所得サルハナシ。今年五穀ヲ食ヒ尽セハ又明年五穀生シ、衣尽レハ新衣ヲ製シ、世界億万ノ居住ヲ作ルニ億万ノ草木ヲ伐ルト雖トモ、草木生々シテ不止。米穀・衣服・器財皆悉ク充満ス。用レハ又生シ、伐レハ又生シ、些モ間断アルコトナシ(『報徳秘録』196、報徳博物館資料集2、101頁)

貧民限りあり、廃田限りあり、財に至ては限りなし。何ぞや。人民必ず限りあり。廃地何万石と云とも亦必ず限りあり。独り生財に至ては今年幾万の米粟を生じ幾千歳といへども生々窮りなし(『報徳記』七、全集三十六、224頁)

また、「天地の道」と並べて、「親子の道」「夫婦の道」「農業の道」の4つを、尊徳は「両全完全の物」「両全両楽」と呼んでいる。

天は生々の徳を下し、地は之を受けて発生し、親は子を育して、損益を忘れ混(ひたす)ら生長を楽み、子は育せられて父母を慕ふ、夫婦の間、又相互に相楽んで、子孫相続す、農夫勤労して、植物の繁栄を楽み、草木又欣々として繁茂す、皆相共に苦情なく、悦情のみ(『二宮翁夜話』第42条、全集三十六、705−6頁)

それ以外の道は、一方が楽しめば、一方が苦しむ。相対するものは、一方が楽しめば、もう一方は苦しみ、一方が極楽ならば、もう一方は地獄となる。ここからすれば、一方が生ならば、もう一方は死である。生まれれば必ず死ぬ運命を、人間は逃れるこ

とはできない。

これを「両全両楽」の道に転じるには、太陽が「土中ニ米ヲ積重」ねるように、またそれに倣って農夫が秋から冬にかけては芋種を植えて来春を待つように、今生の生を前倒しして、あらかじめ種を地に落とし、来たるべき生を俟ちつつ、余剰となった今の生の時間を、来るべき生を充実させるために当てて、励み勤める以外ない。

生を前倒しする(譲る)ことで得られる「両全両楽」は、永遠のlife(生命)であろう。尊徳はそれを「天命を伸ばす」と表現した。

> 此世界は自転運動の世界なれば、決して一所に止らず、人事の勤惰に仍て、天命も伸縮すべし(『二宮翁夜話』第29条、全集三十六、694頁)

身体の外に、目には見えないが「生々スル所以ノモノ」があると尊徳は言う。この「生々スル所以ノモノ」が「天命」、永遠のlife(生命)である。

興味深いのは、事の成否に尊徳がそれほど拘っていない点である。

> 世の中の事ハ万仕掛て死ぬる天理なり。春夏秋冬時々刻々、草木止事なきか如し(『報徳教示略聞記』、同106頁)

なぜ事業は中途で終わることが多いのか。それは「人道」だからである。

> 製作ノ人道ナレハ破廃常ニ至ルハ必然ナリ。是ヲ終年勤動シテ補理製作些モ不怠ハ有生日用之常也ト知テ行フ者、即人倫之道也(『報徳秘録』第136条、報徳博物館資料集2、73頁)

「人道」の製作物は、「天道」によっていつも滅ぼされる。滅ぼされながらも、つねにそれに半分は従い、半分は逆らって製作しつづけるのが「人道」である。

いわば、つねに滅び、つねに蘇りながら、「天地のもぢり尽せぬ命綱」を綯っていく。生滅のサイクルが早ければ早いほど、精勤の余剰として生み出される生命の縄は

長く伸びていく。

> 天地ノ運数些モ無間断、是ヲ以テ万物生ス。人間断ナク勉励運動天ノ如クナラハ、困窮ヲ欲スレ共来ラス。･･･幸福ヲ得ラル自在(『報徳秘録』301、同151頁)

その一歩一歩の勤めの中に、永遠のlife(生命)はある。

3、素材からの課題の考察

(当日、口頭で発表予定)